



歌詞or詩

yuki yuna 12

電車

学校の帰り道

急いで駅に走った

改札口に定期を通して階段を登る

ホームには電車を待っているあの子の姿

今日こそ声をかけよう 遠目から見ているだけの自分は卒業するんだ

キミのことを知りたい

キミの声を聞きたい

どうしてだか気になるんだ、キミのこと ボクの思い届け

キミに初めて会ったのは電車の中

座席が隣同士になったのは今でも覚えている

だんだん混み始め、乗用者が増えてきた時

ちょうどキミの目の前に赤ん坊を抱えた母親がやってきた

ボクは人目を気にして勇気を出すことができなかったのに

キミは席を譲っていたね

きっと その時に ボクはキミを好きになったんだ

時間を戻せるなら

六歳になった日
ボクの前から去った

出会ったのはキミがおぼつかない足で転がりながらも歩いていた時
どこに行くのも一緒に スヤスヤと眠るキミの笑顔はほんとうに可愛かった
赤い紐をボクの首にまいてリボンにしてくれたこともあったね
そうそう
耳が取れた時 キミは大声で泣いてお母さんに泣きついてたっけ
それも今は懐かしい思い出

光一つ射さない真っ暗な暗闇
隙間もないほどの狭い空間
幾度の時を経たのだろう
変わらなければいいなと思っているのはボクだけなのだろうか
あの時のように笑って 寄り添って 時を一緒に過ごせたらいいと思うのはわがままなのかな
一瞬でもいい この扉をいつか開けてくれることを願って